

平成24年度
さらなる学校改善に向けて
～全国学力・学習状況調査の結果分析より～

平成24年11月22日
掛川市 全国学力・学習状況調査分析委員会

1 はじめに

平成24年度全国学力・学習状況調査は、掛川市内全小中学校を対象に行われた。本調査は、文部科学省により、「全国的な義務教育の機会均等とその水準の維持向上」を目的に平成19年度から実施されているが、平成23年度は東北地方太平洋沖地震の影響により中止となった。平成24年度は、国語、算数・数学に、新たに理科も追加されての実施となった。

すでに全国及び県からは本年度調査結果が示されたところではあるが、本分析委員会は、掛川市の教育及び児童生徒の状況を把握し、その成果と課題を見極め、児童生徒の学力向上に向けた学びの環境改善に資することを目的として設置された。

また、本報告は、平成24年度の結果分析をまとめたものであるが、各教科ごとの改善策を具体的に示すことで、よりよい環境改善に役立てていただけるよう配慮した。さらに、平成24年度の結果分析と併せて、平成21年度掛川市内小中学校の質問紙による結果を比較・分析することにより、掛川市の児童生徒の学力向上に向けた学びの環境改善の経年変化も考察した。

なお、本調査結果の取扱いについての配慮事項は、文部科学省による実施要領に以下のようにある。（「平成24年度全国学力・学習状況調査に関する実施要領」より一部抜粋）

本調査により測定できるのは学力の特定の一部であること、学校における教育活動の一側面に過ぎないことなどを踏まえるとともに、以下の点に十分配慮する。

(ア) 教育委員会や学校は、保護者や地域住民に対して域内の教育及び当該学校の状況について説明責任を有していること

(イ) 情報公開条例等との関係

(ウ) 序列化や過度の競争につながらないようにすること

(エ) 各児童生徒の個人情報保護との関係

よって、本分析委員会においても、これらのことに配慮して分析結果をまとめた。本結果については、市内全体の傾向をまとめたものであり、全ての児童生徒、学校に当てはまるものとは限らないが、学校教育や家庭生活の改善のために御活用いただければ幸いである。

2 調査の概要

(1) 調査の対象

小学校第6学年児童1,083人（実施率97.9%）

中学校第3学年生徒 995人（実施率96.0%）

※病欠等の理由で実施率は100%になっていない。

(2) 調査実施日 平成24年4月17日（火）

(3) 調査の内容

ア 教科に関する調査

・主として「知識」に関する問題(国語A、算数・数学A)

・主として「活用」に関する問題(国語B、算数・数学B)

- ・主として「知識」に関する問題と主として「活用」に関する問題を一体的に出題(理科)

イ 生活習慣や学習環境等に関する質問紙調査

- ・児童生徒に対する調査
- ・学校に対する調査

3 分析委員会及び分析の方針

分析委員会は、市内小中学校の校長・教頭・教諭の17名で組織された。小学校部会、中学校部会の2部会に分かれ、教科及び質問紙ごと、以下の方針に従って分析を行った。

なお、理科の分析にあたっては、主に「知識」に関するものを「理科(知)」、主に「活用」に関するものを「理科(活)」と記した。

- (1) 各教科及び質問紙(児童生徒・学校)の結果を全国・県の状況と比較・分析することを通して、掛川市の教育に関する特徴や課題を整理し、考察を加え、改善策をまとめる。
- (2) 各教科の状況と質問紙の内容のクロス集計から、教科の力をつけているのは、どのような児童生徒かを分析する。
- (3) 質問紙においては、平成21年度実施のデータとの比較もし、生活習慣、学習習慣について考察を加える。

4 分析結果

教科に関する調査では、全国・県と比較して、小学校は平均正答率の低いものが多く、中学校は、全てが高い傾向となった。

小学校においては、全ての教科において、全国よりも平均正答率が低かった。特に理科(知)は、3%以上低かった。しかし、県と比較した場合、国語ABはともに1%程度低かったが、算数AB及び理科(知)(活)は、1%程度高かった。

一方、中学校では、全ての教科において、全国・県よりも平均正答率が高かった。特に、全国との比較においては、国語A以外の全てにおいて、4～5%程度高かった。また、県との比較においても、全ての教科で高く、特に国語B・理科(知)については、3%程度高かった。

【市平均正答率と国・県との比較】

【小学校】	県	全国	【中学校】	県	全国
国語A	△	△	国語A	○	○
国語B	△	△	国語B	◎	◎
算数A	○	△	数学A	○	◎
算数B	○	△	数学B	○	◎
理科(知)	○	▲	理科(知)	◎	◎
理科(活)	○	△	理科(活)	○	◎

※3%差を基準：3 ≧ ◎、3 > ○ > 0、0 > △ > -3、-3 ≧ ▲

【小学校教科】

(1) 国語

ア 成果と課題

(%)

全国・県に比べて特に正答率の高かった調査問題	本市	県	全国
漢字を読む。(新しいビルを建築する) 【A 1(1) 伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項・短答式】	93.1	89.3 (+3.8)	89.3 (+3.8)
話し手の話の内容を聞きながら書いた質問について、その狙いを適切に説明したものを選択する。 【A 2 話すこと・聞くこと・選択式】	67.3	66.8 (+0.5)	65.2 (+2.1)
目的や意図に応じ、依頼する具体的な内容として適切なものを選択する。【B 1 書くこと・選択式】	64.9	63.9 (+1.0)	64.8 (+0.1)

全国・県に比べて特に正答率の低かった調査問題	本市	県	全国
新聞の報道記事のリードに必要な事柄を整理し、一文にまとめて書く。【A 7 書くこと・短答式】	33.8	36.5 (-2.7)	43.2 (-9.4)
二つの記事に書かれている内容を結びつけながら読み、理由となる事実を基にして自分の考えを記述する。 【B 3 四 書くこと・読むこと・記述式】	31.5	35.4 (-3.9)	37.7 (-6.2)

※【 】内は、問題番号、学習指導要領の領域等、問題形式の順。

総じて国語A(知識)、国語B(活用)ともに平均正答率は、全国を下回っており県も下回っている。

しかし、学年別漢字配当表の当該学年までに配当されている漢字を正しく読んだり、書いたりする問題の正答率は、全国・県をともに上回っている。これは、日々の漢字の書き取りや学期末などに行われる漢字テストを実施している成果であると考えられる。

また、「選択式」問題の平均正答率は、全国・県を上回っている問題が多い。これは、問題文を読み、適切な内容を選択する力がついていると考えられる。

一方、「新聞の報道記事のリードに必要な事柄を整理し、一文にまとめて書く」問題の正答率が低かった。また、「二つの記事に書かれている内容を結びつけながら読み、理由となる事実を基にして自分の考えを記述する」問題の正答率が低かった。これは、問題文を読み、適切な解答を自分で考えて書くことに課題があると考えられる。

イ クロス集計の結果

質問紙調査結果と教科に関する調査結果の相関関係を分析したクロス集計の結果では、「400字詰め原稿用紙2～3枚の感想文や説明文を書くことは難しいと思いますか」の質問に、「思わない」と回答した児童の方が、「思う」と回答した児童より、国語Aにおいて7.9%、国語Bにおいて13.8%も平均正答率が高かった。また、「今回の国語の問題について、解答を文章で書く問題がありましたか、どのように解答しましたか」の質問に、「最後まで解答を書こうと努力した」と回答した児童の方が、「書く問題は全く解答しなかった」と回答した児童より、国語Aにおいて32.7%、国語Bにおいて30.9%も平均正答率が高かった。書くことに苦手意識の低い児童ほど、平均正答率が高くなる傾向であった。

さらに、「読書は好きですか」の質問に「当てはまる」と回答した児童や、「新聞やテレビのニュースなどに関心がありますか」の質問に「当てはまる」と回答した児童の平均正答率も高かった。普段の生活で活字や情報に触れる機会が多い児童ほど、平均正答率が高くなる傾向であった。

ウ 改善策

(ア) 読書や読み聞かせの時間をさらに充実させる。

質問紙調査結果と教科に関する調査結果の相関関係を分析したクロス集計の結果から、「読書は好きですか」の質問に「当てはまる」「どちらかと言えば、当てはまる」と回答した児童は、75.3%と高かった。これは、学校生活の中で朝読書の時間や読み聞かせの時間を充実させた成果であると考えられる。普段の生活で活字や情報に触れる機会が多い児童ほど平均正答率が高い傾向であったことから、今後も読書や読み聞かせの機会を重視し、さらに充実させることが有効であると考えられる。

(イ) 資料を読み取った上で内容を明確にして書いたり話したりする活動を取り入れる。

例えば、新聞を教材にする時、単に記事の内容を読み取るだけでなく、記事の内容を要約し、記事に対する自分の考えを明確にして書いたり、話し合ったりする活動が有効と考えられる。

また、400字詰め原稿用紙2～3枚程度の字数で、自分の考えや収集し整理した情報を文章化して書く活動を意図的に増やすことも、有効であると考えられる。

(2) 算数

ア 成果と課題

(%)

全国・県に比べて特に正答率の高かった調査問題	本市	県	全国
3/7 - 2/5 を計算する。 【A 1 (6) 数と計算・短答式】	88.5	86.4 (+2.1)	85.7 (+2.8)
596の1/100の大きさの数を少数で書く。 【A 2 (2) 数と計算・短答式】	78.9	77.8 (+1.1)	73.7 (+5.2)
示された表から、合計の人数を基にした乗れる人数の割合は、男子と女子ではどちらの方が大きいか判断し、そのわけを書く。 【B 5 (3) 数量関係・記述式】	26.9	23.9 (+3.0)	23.3 (+3.6)

全国・県に比べて特に正答率の低かった調査問題	本市	県	全国
120 cmの赤いテープの長さが、白いテープの長さの0.6倍に当たるとき、白いテープの長さを求める式を書く。 【A 3 (2) 数と計算・短答式】	35.9	39.8 (-3.9)	41.4 (-5.5)
はかりの目盛りと1人分の材料と分量を基に、班の人数分のご飯を作るために必要な水の重さの求め方と答えを書く。 【B 4 (3) 数と計算・量と測定・記述式】	29.5	29.4 (+0.1)	32.8 (-3.3)

※【 】内は、問題番号、学習指導要領の領域等、問題形式の順。

総じて、算数A（知識）算数B（活用）どちらの平均正答率も、全国の平均正答率よりも下回ったが、県と比べると上回っている。その中でも「数と計算」領域の四則計算の中には、平均正答率が全国・県ともに上回っている問題もあり、分数の減法や除法の計算などの基礎基本が定着していると考えられる。

また、「記述式」は、他の問題と比べると、平均正答率が低いものの、全国・県の平均正答率より上回っている。このことから、必要な情報を用いたり、表から適切な数値を取り出したりして、自分の考えや求め方を書くことができると考えられる。

一方、基準量を求める場面において、1に当たる大きさを求めるために除法を用いて求められる問題の正答率が低かった。これは、基準の量と比較する量との割合の関係が理解できていないためと考えられる。また、はかりを適切に読み取り、与えられた条件をもとに筋道を立てて考え、重さの求め方を記述する問題の正答率も低かった。これは、与えられた数量やそれらの関係を整理し、問題を解決ができないことが理由だと考えられる。

イ クロス集計の結果

質問紙調査結果と教科に関する調査結果の相関関係を分析したクロス集計の結果では、「算数の勉強が大切であると思う」「算数の授業で学習したことは、将来、社会に出たときに役立つと思う」のように算数を学ぶことの大切さを感じている児童や、「算数の授業で問題の解き方や考え方がわかるようにノートに書いている」「言葉や式を使って、わけや求め方を書く問題を最後まで解こうと努力した」のような算数に対する意欲関心が高い児童の平均正答率が高かった。

また、当然のことと思われるが、「算数の勉強は好きである」「算数の授業の内容がよくわかる」のように算数の学習を肯定的にとらえている児童の方が、肯定的にとらえていない児童よりも、それぞれ26.7%、46.1%平均正答率が高かった。

さらに、「算数の問題の解き方がわからないときは、あきらめずにいろいろな方法を考えている」「算数の授業で問題を解くとき、もっと簡単に解く方法がないか考える」と回答した児童の方が、それぞれ32.1%、22.3%平均正答率が高かった。

ウ 改善策

(ア) 解決に複数の段階が必要な学習場面を取り入れる。

必要な数量を求め、与えられた条件をもとに筋道を立てて考えるために、解決に複数の段階が必要な問題を授業に取り入れていく必要がある。また、場面理解のために、文章を最後までよく読み、わかっていることと求めることを明確にさせたい。そうすることで、解決の見通しが明確になり、手順を考えて求めていくことができるようになると考えられる。

(イ) 絵や図、数直線で表す活動を積極的に取り入れる。

問題場面から数量の関係を正しくとらえるために、低学年の段階から文章からすぐに立式するのではなく、まず絵や図、数直線で表す活動を積極的に行いたい。また、長さや広さ、重さを、実際に計測するなどの体験活動を取り入れていきたい。そうすることで、数ではなく、数量としてとらえることができ、問題場面をイメージすることができる。

(ウ) 自分の考えを説明する言語活動を積極的に取り入れる。

筋道を立てて考え、より深い思考をするために、自分の考えを隣の児童に説明したり、班ごとに説明したりするような学習形態を取り入れる。そうすることで、自分の考えがより明確になる。また、複数の考えを比較することで、より良い解決方法を見つけることができ、算数的思考を深めることができると考えられる。

(3) 理科

ア 成果と課題

(%)

全国・県に比べて特に正答率の高かった調査問題	本市	県	全国
砂糖水に溶けている氷砂糖の様子について、実験結果から適切な図を選び、選んだわけを書く。 【1(3) 物質・記述式】	58.9	52.9 (+6.0)	54.4 (+4.5)
天気の様子と気温の変化とを関係付けて、気温の変化を表したグラフを選び、選んだわけを書く。 【4(5) 地球・記述式】	19.2	15.1 (+4.1)	16.9 (+2.3)
スイカの受粉と結実の関係を調べる実験について、適切な実験方法を選び、選んだわけを書く。 【2(5) 生命・記述式】	34.9	31.2 (+3.7)	32.1 (+2.8)

全国・県に比べて特に正答率の低かった調査問題	本市	県	全国
「おしべの花粉がめしべの先につく」ことを表す言葉を書く。 【2(4) 生命・短答式】	64.5	65.3 (-0.8)	77.2 (-12.7)
車の進行方向と電流の向きとを関係付けて考え、並列つなぎの適切なつなぎ方を選ぶ。 【3(3) エネルギー・選択式】	47.7	48.2 (-0.5)	52.7 (-5.0)

※【 】内は、問題番号、学習指導要領の領域等、問題形式の順。

総じて、理科(知識)、理科(活用)ともに平均正答率は、全国を下回っているが、県を上回っている。また、学習指導要領の全ての領域(「物質」「エネルギー」「生命」「地球」)及び「選択式」「短答式」問題の平均正答率も、全国を下回っているが、県を上回っている。

「記述式」問題については、全ての問題の正答率が、全国・県をともに上回っている。これは、水に溶けている物の様子について実験結果を基に自分の考えを改善してその理由を記述すること、天気の様子と気温の変化の関係についてデータを基に分析してその理由を記述すること、植物の受粉と結実の関係を調べる実験について結果を基に方法を改善してその理由を記述することができていると考えられる。

一方、「おしべの花粉がめしべの先につくことを表す言葉を書く」問題の正答率が低かった。これは、植物の受粉と結実の関係について、科学的な言葉や概念を理解することに課題があると考えられる。

また、「車の進行方向と電流の向きとを関係付けて考え、並列つなぎの適切なつなぎ方を選ぶ」問題の正答率も低かった。これは、乾電池のつなぎ方と電流の向きとを関係付けて考えることに課題があると考えられる。さらに、並列つなぎについて、乾電池の向きと車の進行方向とを関係付けて考えることにも課題があると考えられる。

イ クロス集計の結果

質問紙調査結果と教科に関する調査結果の相関関係を分析したクロス集計の結果では、「理科の授業で、観察や実験の結果から、どのようなことがわかったのか考えている」「理科の授業で、自分の考えをまわりの人に説明したり発表したりしている」のように意欲的な授業態度の児童や、「科学や自然について疑問を持ち、その疑問について人に質問したり、調べたりすることがある」「自然の中で遊んだことや自然観察をしたことがある」と回答した児童の平均正答率は、否定的な回答をした児童の平均正答率より10%以上高かった。

また、当然のことと思われるが、「理科の勉強は好き」「理科の授業の内容はよく分かる」「理科の勉強は大切だと思う」「観察や実験を行うことは好き」のように理科の学習を肯定的にとらえている児童の平均正答率は、否定的にとらえている児童の平均正答率より10%以上高かった。

さらに、「言葉や文章を使って、わけを書く問題に最後まで解答を書こうと努力した」と回答した児童や、「解答時間は十分だった」と回答した児童の平均正答率は、「途中であきらめた・全く解答しなかった」や「解答時間が不十分だった」と回答した児童の平均正答率より20%以上高かった。

ウ 改善策

(ア) 観察や実験の結果を考察したり、自分の考えを説明したりする学習活動をさらに取り入れる。

観察や実験の結果からどのようなことがわかったのか考える時間を設定し、自分の考えを持たせる学習活動が有効と考えられる。また、学習問題に対する自分の考えや、観察や実験の結果からの考察をまわりの人に説明したり発表したりする学習活動も有効と考えられる。

(イ) 学習で身につけた科学的な言葉や概念を使用して説明したり、観察に生かしたりする学習活動を取り入れる。

例えば「受粉」については、単におしべの花粉がめしべの先に付くという名称のみを記憶するのではなく、「受粉」「おしべ」「めしべ」という名称とその様子を観察した事実からとらえていくようにする。また、おしべの花粉の役割について予想や仮説を立てて、顕微鏡で観察することや、めしべの先の様子を観察し、花粉がつきやすくなっていることについて話し合うことも有効な学習活動と考えられる。

(ウ) 実験器具を用いて数値化を図ることにより、電気など目に見えないエネルギーをイメージをもってとらえる学習活動を取り入れる。

例えば、並列つなぎの電流の向きについては、検流計を使用して、乾電池の向きを変えることで針の振れる方向が変わることから、電流の向きと針の振れる方向とを関係づけてとらえるようにする。

【中学校教科】

(1) 国語

ア 成果と課題

(%)

全国・県に比べて特に正答率の高かった調査問題	本市	県	全国
相手の発言を注意して聞き、自分の考えを書く。 【B1三 話すこと、聞くこと・書くこと・記述式】	31.4	21.9 (+9.5)	19.7 (+11.7)
物語の内容や登場人物の言動の意味などをとらえ、自分の考えを書く。 【B3三 書くこと、読むこと・記述式】	71.8	62.4 (+9.4)	58.9 (+12.9)

全国・県に比べて特に正答率の低かった調査問題	本市	県	全国
物語の展開や表現の特徴をとらえる。 【B3一 読むこと・選択式】	57.1	58.1 (-1.0)	61.6 (-4.5)
比喻という言葉と結びつけて、表現の仕方を理解する。 【A3二 読むこと・短答式】	27.4	35.9 (-8.5)	40.4 (-13.0)
語句の意味を理解し、文脈の中で適切に使う。 【A7四イ 言語事項・選択式】	63.5	64.6 (-1.1)	66.3 (-2.8)

※【 】内は、問題番号、学習指導要領の領域等、問題形式の順。

総じて、国語A(知識)、国語B(活用)ともに平均正答率は全国・県を上回っており、特に国語B(活用)で顕著であった。

「書くこと」の領域については、条件に従ってきちんと文章化できる生徒が多く、全国・県に比べても優れていたといえる。例えば3つの条件に従って書く問題や、対談の原稿を読んで一方の発言を取り上げて考えを書く問題などは大変高い正答率だった。しかし、書く問題については無回答も少なくなく、書くことへの抵抗感をもつ生徒への指導も重要であると感じられる。

一方で、「言語事項」については、基礎的な漢字の読みや対義語を答える問題、適切な連体詞を選ぶ問題において正答率が低かった。これは、日ごろの新出漢字の定着や、語彙を増やす取組が不十分であることが原因であると考えられる。

また、「読むこと」の領域では、カメラの使用法について、わかりやすく説明する問題や、朗読原稿のあらすじを短い言葉で言い表したものを選択する問題の正答率が低かった。長文を読んで、必要な情報を取り出し、要約する力を育てることが重要であると考えられる。

イ クロス集計結果から

質問紙調査結果と、評価に関する調査結果の相関関係を分析したクロス集計結果では、「家で学校の宿題をしている」と答える生徒の平均正答率は非常に高く、「していない」と答えた生徒との間に約30%の開きがある。国語に限ったことではないが、基本的な学習習慣の定着が学力向上の大前提となると再認識できる。

「読書が好きですか」という質問に対して、好きと答える生徒の方が平均正答率が高い。市内の中学校は朝読書に力を入れており、全国・県と比較しても読書好きの生徒が多いため、その成果が今回のテスト結果に如実に表れていると考えられる。

「今回の国語の問題について、解答を文章で書く問題があったが、最後まで解答を書こうと努力しましたか」という質問に対して、全国・県と比べても「努力した」と答える生徒が若干多かった。このことから本市では、学習に粘り強く取り組む生徒が多く、書くことに対する抵抗感はあまりないことがうかがえる。

「国語の授業で目的に応じて資料を読み、自分の考えを話したり、書いたりしていますか」という質問では、「はい」と答えた生徒が多く、全国・県よりもかなり高い。また、「当てはまる」と答えた生徒の平均正答率も「当てはまらない」と答えた生徒の平均正答率をはるかに上回っている。これは本市の国語の授業においては、そのような学習活動をしっかり和組み込んだ指導が行われていることによると考えられる。

ウ 改善策

(ア) 日常的な言語活動の充実をはかる。

基礎的な言語事項の定着のために、日ごろから漢字書き取り等の家庭学習に力を入れるとともに、覚えた漢字を日常の文章表現をする場面で、積極的に使う習慣を身につけさせたい。同時に、辞書を常に傍らにおき、活用することで、語彙の幅を広げさせたい。

また、クロス集計結果で触れたように本市が力を入れている読書活動をますます充実させ、読書好きの生徒を増やすことも、言語能力の伸長につながると考える。

(イ) 論理的思考力を伸ばす活動を取り入れる。

論理的思考力を伸ばすために、新聞記事を読んで要約するなど、長文から必要な情報を取り出して再構築する課題に継続的に取り組ませることが有効だと考える。

授業においては、資料や図表から情報を読み取り、説明する活動を積極的に行いたい。また、そのような言語活動は他教科や総合的な学習の中でも実践が可能なので、他の教科とも連携をして、様々な学習場面で生徒の論理的思考力を伸ばすようにしたい。

(2) 数学

ア 成果と課題

(%)

全国・県に比べて特に正答率の高かった調査問題	本市	県	全国
$x = 3$ のときの式 $-x^2$ の値を求める。 【A 2 (2) 数と式・短答式】	73.4	70.9 (+2.5)	66.3 (+7.1)
与えられた三角形と合同な三角形を選ぶ。 【A 6 (3) 図形・選択式】	75.0	70.2 (+4.8)	66.8 (+8.2)
与えられた方法で作図された直線がもつ性質として、正しい記述を選ぶ。 【A 4 (1) 図形・選択式】	66.7	61.6 (+5.1)	56.3 (+10.4)
異なる場合での垂線の作図で、共通して利用されている図形の性質を選ぶ。 【B 4 (3) 図形・選択式】	64.7	62.2 (+2.5)	56.5 (+8.2)

全国・県に比べて特に正答率の低かった調査問題	本市	県	全国
n 角形の内角の和を求める式で、 $(n - 2)$ が表すものを選ぶ。 【A 6 (2) 図形・選択式】	49.0	52.5 (-3.5)	45.7 (+3.3)
フリースローでボールの入った回数と人数の関係をまとめた図から、ボールの入った回数の最頻値を求める。 【A15 (2) 数量関係・短答式】	45.9	49.3 (-3.4)	42.4 (+3.5)
次の1回でより遠くへ飛びそうな選手を選び、その理由を説明する。 【B 3 (2) 数量関係・記述式】	46.4	49.5 (-3.1)	46.1 (+0.3)

※【 】内は、問題番号、学習指導要領の領域等、問題形式の順。

総じて、平均正答率は、数学A（知識）、数学B（活用）ともに、全国・県を上回っている。特に、「数と式」の領域全体の平均正答率は高かった。したがって、身につけておかなければならない学習内容は概ね理解していると考えられる。

「図形」の領域において、「与えられた方法で作図された直線がもつ性質として、正しい記述を選ぶ」「異なる場合での垂線の作図で、共通して利用されている図形の性質を選ぶ」について正答率が高かった。これは、作図の手順を理解し、作図によってできる図形の特徴を的確に捉えることができたと考えられる。

一方、「 n 角形の内角の和を求める式で、 $(n - 2)$ が表すものを選ぶ」「ボールの入った回数の最頻値を求める」の正答率は、県に比べて低かった。これは、数学で使う公式やきまりの根拠及び用語の意味を十分理解していないと考えられる。

また、「次の1回でより遠くへ飛びそうな選手を選び、その理由を説明する」のように、判断の理由を数学的な表現を用いて説明する問題の正答率が県に比べて低かった。これは、問題解決の見通しを明確にして、筋道を立てて説明する力が不足していることが課題であると考えられる。

イ クロス集計の結果

質問紙調査結果と教科に関する調査結果の相関関係を分析したクロス集計の結果では、「数学の授業で問題を解くとき、もっと簡単に解く方法はないか考える」「数学の授業で学習したことを普段の生活の中で活用できないか考える」のように、常に複数の解決方法を探ろうとする生徒や、「数学ができるようになりたいと思う」「数学の問題の解き方がわからないときは、あきらめずにいろいろな方法を考える」のように、試行錯誤しながらも、あきらめずに挑戦する意欲のある生徒の平均正答率が高かった。

また、「数学の授業で、公式やきまりを習うとき、その根拠を理解するようにしている」生徒の方が、そうでない生徒よりも平均正答率が33.8%高いことから、単に公式やきまりを暗記して使うだけではなく、その意味や根拠まで追求する態度が学力向上につながると考えられる。

さらに、「今回の数学の問題について、解答を言葉や式を使って説明する問題がありましたが、最後まで解答を書こうと努力した」のように、粘り強く取り組んだ生徒の平均正答率も約40%高かった。

ウ 改善策

- (ア) 自分の考え及びその理由について、筋道を立てて説明する学習活動を充実させる。

個人の考えを持たせる時間を十分にとり、それをノートやワークシート等に、図や式など数学的な表現方法を効果的に用いてまとめさせるようにする。また、全体の場合だけでなく、小集団活動も効果的に活用して説明する場面を多く作り、友達と意見交換をすることを通して、よりの確な説明ができるようにする。

- (イ) 事象を多面的に捉え、より良い解決方法を探る力を育成するために、解き方や考え方が複数ある問題を多く扱う。

様々な角度から思考する場面をつくることで、試行錯誤しながら、より良い方法を見つける体験をさせる。例えば、リーグ戦の試合数を求める際に、図や表などを使って求める方法だけではなく、 n 角形の内角の和を求める公式を用いて2次方程式をつくる方法など、他の単元とも関連した考え方を取り上げれば、さらに効果的である。

- (ウ) 公式の成り立ちやきまりの根拠などを調べる学習を大切にする。

例えば、「マイナス3の2乗」は、「 $(-3)^2$ 」か「 -3^2 」のどちらなのか、またその答えがどうなるのか討論させることで、計算のきまりを理解させる活動や、公式や定理を単に暗記するのではなく、調べ学習を通してその根拠や理由を自分でまとめる活動を取り入れる。その際に使われる数学用語について、その定義や本質を正確に理解させ、正しく使えるよう留意する。

(3) 理科

ア 成果と課題

(%)

全国・県に比べて特に正答率の高かった調査問題	本市	県	全国
電圧が1.2Vのときの電流計の図から、電流の大きさを読みとり答える。【2(1) 物理・短答式】	57.4	49.9 (+7.5)	44.3 (+13.1)
食塩水がいくらでも濃くできるわけではない理由を説明する。【4(4) 化学・記述式】	58.6	49.7 (+8.9)	46.6 (+12.0)
食塩水のようにすを、食塩の粒子のモデルで表したものを選ぶ。【4(5) 化学・選択式】	80.9	75.8 (+5.1)	71.6 (+9.3)

全国・県に比べて特に正答率の低かった調査問題	本市	県	全国
抵抗の直列つなぎ、並列つなぎなどに関する基礎知識を活用して、他者の実験方法を検討して、正しい実験方法に訂正する。【2(2) 物理・記述式】	9.3	10.5 (-1.2)	7.6 (+1.7)
地層観察の結果から、観察地における地層のつながり方を考察し、地層の傾いている方向を推察する。【3(2) 地学・選択式】	30.6	30.3 (+0.3)	31.2 (-0.6)

※【 】内は、問題番号、学習指導要領の領域等、問題形式の順。

総じて、すべての問題においてほぼ全国・県の正答率を上回っており、特に化学的領域が大きく上回っている。

化学的領域では、「食塩水がいくらでも濃くできるわけではない理由を説明する」や「食塩水のようにすを、食塩の粒子のモデルで表したものを選ぶ」問題の正答率が高かった。これは、水溶液の性質など基礎的事項に関して十分定着しており、身近な食塩水の性質を普段の生活で理解し、活用することができていると考えられる。

また、「電圧が1.2Vのときの電流計の図から、電流の大きさを読みとり答える」問題の正答率が高かった。これは、実験用具の使い方について正しく扱う知識をもっており、授業で行われる実験に対して、真剣に取り組んでいるためであると考えられる。

一方、「他者の実験方法を検討して、正しい実験方法に訂正する」問題の正答率が低かった。これは、実験で与えられた条件を整理して考えること、直列つなぎと並列つなぎの特徴を問題と関連させて考えることに課題があると考えられる。また、「地層観察の結果から、観察地における地層のつながり方を考察し、地層の傾いている方向を推察する」問題の正答率も低かった。これは、問題に示された地層の様子からそれらを組み合わせることで地層を想像することに課題があると考えられる。

イ クロス集計の結果

質問紙調査結果と教科に関する調査結果の相関関係を分析したクロス結果では、「自然の中で遊んだことや自然観察をしたことがある」のように自然と関わりを多くもっていると感じている生徒の割合が、全国・県に対して高く、そのような生徒の平均正答率が高くなっている。

また、「観察や実験を行うことは好きですか」という質問に対して「当てはまる」と答えた生徒の割合が全国・県より高く、さらに、実験にもとづいて答える問題の正答率が高かった。

さらに「理科の授業で、自分の考えや考察をまわりの人に説明したり発表したりしていますか」「理科の授業でものをつくることは好きですか」に「当てはまる」と回答した生徒の割合が、全国・県よりも高く、本市の生徒は理科の授業に意欲的に取り組んでいると考える。また、その生徒の平均正答率も、それぞれ24.2%、15.5%高かった。

また、クロス集計ではないが、「将来、理科や科学技術に関係する職業に就きたいと思いませんか」という質問項目に、「当てはまる」と答えた生徒の割合が9.3%で、全国の9.0%より高かったが、県の9.9%より低かった。

ウ 改善策

(ア) 学習で身につけた基礎知識を活用して、自分の実験方法を説明したり、仲間の考えた実験方法を検討したりする活動を取り入れる。

例えば、「電流とその利用」の単元では、抵抗の直列つなぎ、並列つなぎの特徴の知識をしっかりと身につけることが大切である。そして、基礎知識を活用して、目的とする実験結果を得るための実験方法を生徒同士で検討したり、期待される実験結果であったのかを検証したりすることが有効な学習活動だと考えられる。

(イ) 地学領域では、実際の自然に触れたり、自然を再現した模型を活用したりして、イメージがもてる学習を取り入れる。

「地層のつながり」では、離れた場所にある地層のつながりや順序を図や方位からイメージする必要がある。そのために、地層模型や地層に似せた粘土などの具体物を授業に活用したり、校外学習で実際に地層を見て考える実習を積極的に取り入れたりすることが有効であると考えられる。

【小学校質問紙】

(1) 児童質問紙

ア 成果と課題

(%)

全国・県に比べて特に肯定的な回答が多かった調査問題	本市	県	全国
普段（月～金曜日）、何時ごろ起きますか。（午前6時半より前）	66.3	64.5 (+1.8)	38.9 (+27.4)
普段（月～金曜日）、何時ごろに寝ますか。（午後10時前という回答）	64.3	59.1 (+5.2)	46 (+18.3)
家で、自分で計画を立てて勉強をしていますか。	60.3	53.2 (+7.1)	58.0 (+2.3)
今住んでいる地域の行事に参加していますか。	84.5	69.7 (+14.8)	63.2 (+21.3)

全国・県に比べて特に肯定的な回答が少なかった調査問題	本市	県	全国
新聞やテレビのニュースに関心がありますか。	60.1	61.5 (-1.4)	65.9 (-5.8)
国語の勉強は好きですか。	52.3	53.4 (-1.1)	63.0 (-10.7)
算数の勉強は好きですか。	64.2	66.2 (-2.0)	64.9 (-0.7)
理科の勉強は好きですか。	78.1	78.3 (-0.2)	81.5 (-3.4)

掛川市の子どもたちは、全国・県と比較して、「午前6時半よりも前に起きる」児童や、「午後10時前に寝る」児童が全国・県を大きく上回っている。また、「家で、自分で計画を立てて勉強をしている」児童も多く、「学校の授業時間以外に、普段(月～金曜日)、1日当たり1時間以上学習している」児童も多い。これらのことから、掛川市では、望ましい生活習慣が身につけており、落ち着いて学習できる環境が整っているといえる。

また、積極的に地域の行事に参加する児童が多く、地域に愛着を持っていると思われる。

一方、新聞やテレビのニュースへの関心が低いことから、社会の出来事を知ったり、新聞などの文章を読んだりすることが少ないと思われる。

イ 3年前との比較

3年前の小学校6年生と比べると、「家の人と学校での出来事を話しますか」という質問項目に肯定的な回答をした児童が76.0%から79.1%に増えており、「家の手伝いをしていますか」という質問項目についても、77.3%から81.0%に増えている。これらのことから、家族との触れ合う機会が一層増えてきているといえる。

また、「人の気持ちがわかる人間になりたいと思いますか」という質

問項目に肯定的な回答をした児童が64.6%から69.7%に増えており、「人の役に立つ人間になりたいと思いますか」という質問項目についても、65.0%から70.7%に増えている。これらのことから、3年前より自己有用感が高まっているといえる。

ウ クロス集計の結果

「毎日同じぐらいの時刻に寝ている」「毎日同じぐらいの時刻に起きている」「毎日朝食を食べている」等の質問項目に肯定的な回答をした児童は、平均正答率が高かった。また、「学校の授業時間以外に、普段（月～金曜日）、1日あたりどれぐらいの時間、勉強をしますか」という質問項目に対して、「1時間以上勉強している」と回答した児童の平均正答率も高かった。総じて、基本的な生活習慣や学習習慣が身につけている児童ほど、平均正答率が高いといえる。

また、「友だちとの約束を守っていますか」「学校のきまりを守っていますか」という質問項目や、「いじめは、どんな理由があってもいけないことだと思いますか」という質問項目に肯定的な回答をした児童の方が、平均正答率が高い傾向も見られた。

エ 改善策

(ア) 生徒指導や学級経営の充実を図る。

約束やきまりを守り、規範意識が高い児童の平均正答率が高いことから、生徒指導や学級経営に力を入れ、基本的な生活・学習習慣が身につくようにしていくことが大切だと考える。

(イ) 教科の楽しさを実感できる授業づくりをする。

小学校の教科に関する調査では、全国・県と比較して、平均正答率が低いものが多かったが、質問紙調査の「国語の勉強は好きですか」「算数の授業が好きですか」「理科の勉強が好きですか」という質問項目に対する肯定的な回答も少なかった。教科の力は、その教科のおもしろさを感じているかで左右されるといえる。授業を通して、教科の楽しさを味わえるような授業づくりに取り組んでいく必要がある。

(ウ) 新聞やニュースに接する機会を増やす。

「新聞やテレビのニュースに関心がありますか」という質問項目に対する肯定的な回答が少ないことから、例えば、新聞やテレビのニュースを朝の会で紹介し合うなど、ニュースに関心を持たせ、それらを互いに伝え合う場を取り入れるなどの取組をしたい。

(2) 学校質問紙

ア 成果と課題

(%)

全国・県に比べて特に肯定的な回答が多かった調査問題	本市	県	全国
第6学年児童に対して、前年度に、「朝の読書」などの一斉読書の時間を設けましたか。(週に複数回)	95.4	75.5 (+19.9)	61.8 (+33.6)
第6学年の児童に対して、前年度までに、児童に対して、学級全員で取り組んだり挑戦したりする課題やテーマを与えましたか。	100.0	95.2 (+4.8)	91.4 (+8.6)

全国・県に比べて特に肯定的な回答が少なかった調査問題	本市	県	全国
学校でテーマを決め、講師を招聘するなどの校内研修を行っていますか。	72.8	83.0 (-10.2)	92.0 (-19.2)
第6学年の児童に対する理科の指導として、前年度までに、長期休業期間中に自由研究などの家庭学習の課題を与えましたか。	31.8	81.7 (-49.9)	83.7 (-51.9)

「朝読書の時間を設ける」「全員で取り組む課題を与える」などの質問項目において、肯定的な回答が多かった。

一方、「校内研修での講師の招聘」「長期休業期間中の自由研究などの家庭学習を与える」などの質問項目は肯定的な回答が少なかった。教師の力量を高めるための講師を招聘した研修、長期休業中の課題の与え方などが課題に挙げられる。

イ 改善策

(ア) 朝読書の充実を図る。

「朝読書」を行うことにより、1日のスタートを落ち着いた雰囲気で行うことができ、安定した学校生活をつくることにつながると考えられる。掛川市の良い取組として今後も継続していきたい。

(イ) 校内研修の充実を図る。

子どもたちが確かな学力を身につけるためには、教員が授業力を向上させていかななくてはならない。そのために、目的をもって講師を招聘したり、小中連携して授業を公開したりするなど、教員の研修を一層充実させていくことが必要である。また、教員が各種研修会に参加する機会を増やすようにしていきたい。

(ウ) 理科に興味を持たせるような活動を組む。

理科の結果が全国の結果から劣っていることから、観察・実験結果でのレポート作成や夏の自由研究など工夫した活動にも取り組んでいく。

【中学校質問紙】

(1) 生徒質問紙

ア 成果と課題

(%)

全国・県に比べて特に肯定的な回答が多かった調査問題	本市	県	全国
今住んでいる地域の行事に参加していますか。	79.8	55.3 (+24.5)	37.7 (+42.1)
普段の授業で自分の考えを発表する機会が与えられていると思いますか。	88.2	84.3 (+3.9)	76.9 (+11.3)

全国・県に比べて特に肯定的な回答の少なかった調査問題	本市	県	全国
携帯電話の使い方について、家の人と約束したことを守っていますか。	21.4	35.1 (-13.7)	44.1 (-22.7)

掛川市の子どもたちは全国・県と比較して、地域の行事に積極的に参加したり、家庭、学校で望ましい生活を送ったりしている生徒が多い。また、学習習慣については、授業に積極的に取り組む生徒が全国・県よりも多い。

「携帯電話の使い方について、家の人と約束したことを守っていますか。」の質問については全国・県よりも下回ったが、そもそも携帯電話の所持率が低く、29.4%である(全国57.7%、県46.3%)。所持している生徒のみで比較した場合は、72.7%の生徒は、約束をおおむね守っており、携帯電話の所持や利用の状況は全国・県よりも良いと考えられる。

イ 3年前との比較

(7) 小学校6年生時との比較(同一集団)

現在の中学校3年生は小学校6年生の時にも全国学力・学習状況調査の調査対象となっている。小学校6年生時と比べ、「学校の規則を守る」が1.1%、「友達との約束を守る」が1.1%、「人の気持ちがわかる人間になりたいと思う」が4.8%と割合が増加していることが特徴である。

一方、起きる時刻は遅くなり、寝る時刻も遅くなっている。これは学習時間が増えたことや部活動を行うようになれば当然のことと思われる。また、家の人と話す時間、学校の出来事を話すこと、近所の人へのあいさつをすることは減っている。これは思春期にありがちな表れの一つととらえることができる。

(イ) 3年前の中学校3年生との比較

3年前の中学校3年生と比べると、「人の役に立つ人間になりたいと思いますか」が4.4%、「将来の夢や目標を持っていますか」が4.7%と増加していることから自己肯定感の高まりがうかがえる。この3年間の各中学校における教育の結果、将来の夢を持った生徒や人の役に立つ人間になりたいと思う生徒が増えてきたと考えられる。

ウ クロス集計の結果

「家で学校の宿題をする」「学校の規則を守っている」「友達との約束を守っている」「近所の人にあいさつする」生徒は、教科の平均正答率が高い。また、「普段の授業で発表する機会が与えられている」と思っている」など学校で授業に積極的に取り組み、意欲的な生徒の平均正答率が高い。

一方、「携帯電話の使い方について、家の人と約束したことを守っていますか」という質問に「携帯電話を持っていない」という選択肢があり、その生徒の平均正答率が高かったことから、携帯電話を持っている生徒の平均正答率が低いことがわかった。また、「文章を書く」、「人に説明する」、「長い文章を読む」ことが苦手な生徒は平均正答率が低い。

エ 改善策

(ア) 生徒指導・学級経営や道徳教育の充実を図る。

規範意識が高い生徒の平均正答率が高いことから、生徒指導を充実させ、引き続き規範意識の高い生徒の育成に努めることが必要である。また、学習に積極的に取り組む生徒の平均正答率が高いことから学級経営の充実を図り、生徒が安心して学習できる環境をつくることにより引き続き重要と考えられる。

生徒指導や学級経営をいっそう充実させるためには、その基盤となる道徳教育を全校体制で推し進めていく必要がある。

(イ) 情報モラル教育の充実を図る。

携帯電話の所持率は小学校6年生時より高くなっている。また、携帯電話を使用している生徒の平均正答率が低くなっている。これは携帯電話を持っていることにより、その使用に時間を拘束され、学習時間が少なくなっていることが原因と考えられる。

さらに携帯電話やコンピュータなどの情報機器は子どもたちの生活にいっそう深く関わるようになってきている。これらのことから、情報関連企業、警察、NPO法人等と連携して、情報モラル教育を積極的に行っていく必要がある。

(ウ) 言語活動の充実を図る。

「文章を書く」、「人に説明する」、「長い文章を読む」ことが苦手な生徒の平均正答率が低い。このことから、例えば、「今日の授業でわかったことを自分なりの言葉でまとめてみよう。」「班の人にわかりやすく説明してみよう。」など、国語のみならずすべての教科で言語活動の充実を図っていくことが重要である。

(2) 学校質問紙

ア 成果と課題

(%)

全国・県に比べて特に肯定的な回答が多かった調査問題	本市	県	全国
第3学年の生徒に対する国語の指導として、前年度までに、家庭学習の課題の与え方について、教職員で共通理解を図りましたか。	100	89.3 (+10.7)	77.1 (+22.9)
第3学年の生徒に対する数学の指導として、前年度までに、家庭学習の課題の与え方について、教職員で共通理解を図りましたか。	100	86.1 (+13.9)	78.0 (+22.0)
第3学年の生徒に対する理科の指導として、前年度までに、家庭学習の課題の与え方について、教職員で共通理解を図りましたか。	100	77.6 (+22.4)	74.1 (+25.9)

全国・県に比べて特に肯定的な回答の少なかった調査問題	本市	県	全国
第3学年の生徒に対して、第1学年のときに、数学の授業において習熟の遅いグループに少人数指導で習得できるようにしましたか。	0.0	6.6 (-6.6)	17.4 (-17.4)
教員は特別支援教育を理解し、前年度までに、第3学年の生徒に対する授業の中で、生徒の特性に応じた指導上の工夫を行いましたか。	66.7	77.6 (-10.9)	82.9 (-16.2)

本市では、各教科の課題の与え方について教職員で共通理解し、課題を与えている学校が特に全国・県よりも高い。

一方、数学の少人数指導を1年生時に行っている学校がなかった。これは、もともと1クラスあたりの人数が少ない学級が多いことと、少人数指導を行える教員数を確保できないことが理由として考えられる。

また、特別支援教育の理解を進め、生徒の特性に応じた指導上の工夫を各学校で充実させていく必要がある。

イ 改善策

(ア) 家庭学習に対する取組の共通理解を図る。

本市はすべての中学校において家庭学習について共通理解を行っている。職員は学校の授業のみならず、家庭学習もきちんと行わせ、確認作業もやり遂げようという意識を持っている。今後も引き続き行っていくことが大切である。さらに、家庭にも課題の取組状況を把握してもらうなど協力を依頼することも必要である。

(イ) 特別支援教育の理念を生かした指導の充実を図る。

生徒にとってよりわかりやすい授業を実践するためには、通常学級においても、一人一人の特性に応じた指導上の工夫を充実させていく必要がある。さらにその情報を共有し、組織として取り組んでいきたい。

5 学びの環境改善のための提言

分析結果を元に、以下の3点を提言する。

- (1) 確かな学力を身につけるための授業改善を進める。
- (2) 生徒指導や学級経営の充実を図る。
- (3) 家庭や地域との連携を推進する。

(1) 確かな学力を身につけるための授業改善を進める。

平成21年度の調査結果分析で示された「活用の力を高める」ことを各学校が課題として受け止め、丁寧な指導と工夫ある授業づくりを心掛けた結果、中学校の各教科の伸びが見られたのではないかと考える。引き続き、「基礎的・基本的な知識及び、技能の習得」に関わる指導の強化を図り、「活用の力を高める」ために以下の内容が必要になる。

ア 「基礎的・基本的な知識及び技能の習得と活用」を確実に行う。

- ・一時間の授業において学習課題と終末の振り返りを一致させるなど、ねらいとまとめがはっきりした授業実践をする。
- ・確実にわかる授業「わかった」と言える場面を設定する。

イ 小・中学校の一貫した指導を進める。

- ・計画的系統的に小学校から中学校への指導を積み上げていく。
- ・小・中のつながりを意識し、小・中を通してグループ学習を取り入れる、書く場を設定するなど、中学校区で実態に応じた指導方法を一貫して取り入れる。

ウ 豊かな体験、視野を広げる指導をする。

- ・新聞・ニュース等にも関心を持ち、伝え合う場を取り入れる。
- ・実験、観察、作成、操作、話し合い等を取り入れ、わかる喜びを実感する授業を行う。
- ・調べたことを新聞形式にまとめる活動などを行う。

エ 言語活動を重視する。

- ・国語をはじめとし、各教科での言語活動の充実を図る。
- ・図書館を活用したり、調べ学習を取り入れたりする。

(2) 生徒指導や学級経営の充実を図る。

学校での人間関係が好ましいこと、達成感や自己有用感を味わうこと、規範意識が高いことが、学力と関係していることは明らかである。児童理解・生徒理解を深めるための教育相談なども各校で充実してきた。さらに、家庭地域と連携して子どもたちを育てていく体制が取れることも今後の重要課題である。

ア 教育相談、学級経営などを丁寧に実践する。

イ あいさつができる・規範意識をもつなどの基本的生活態度を身につけ、道徳教育を充実させる。

(3) 家庭や地域との連携を推進する。

質問紙の分析から、規則正しい生活ができている児童生徒は、平均正答率が高くなることがわかった。学習の基盤となる落ち着いた家庭環境の中で家庭学習などの学習時間が確保されることは学力向上のための大切な条件である。

各中学校区では「子育て十ヶ条」「学びの五ヶ条」「家庭学習の手引き」など保幼小中を通して子どもたちに身につけたいことをまとめ、各家庭に配付し、啓蒙している。

それらの中には、以下のようなことが示されている。

- ・大人から笑顔であいさつ
- ・早寝早起き、家族そろって朝ごはん
- ・テレビやゲームは時間を決めて、たまには「ノーメディアデー」
- ・小さい頃から読み聞かせ親子読書など読書習慣のすすめ
- ・生活リズムを安定(学習時間の目安を学年ごとに提示)
- ・学習環境を整えることや見とどけと励ましなどのすすめ

今後、中学校区学園化をすすめるにあたり、次の2点が重要だと考える。

ア その子にかかわる全ての教員が、中学卒業段階の姿やそれに向けての連続性を認識し、それぞれの発達段階をとらえるとともに、その後の成長を見通した指導(保幼小中一貫教育)に努める。

イ 家庭生活や学習習慣を保護者とともに考え、保幼小中・保護者・地域が共通した取組をすすめる。

これらのことにより、掛川市の児童生徒の学力向上が期待できるとともに、「地域に愛着をもち、自立的に生きる子ども」の育成につながるものと確信する。

6 おわりに

本年度の中学校における好結果は、平成21年度の調査結果で示された課題を克服するために、各校で実践してきたことや、自己肯定感が高まり、将来の夢をもつような教育が行われてきた結果としてとらえることができる。

これは、「掛川市の教育 ～人づくり構想かけがわ～」に示されている以下の内容を計画的に進めている成果ととらえることができる。

- 1 確かな学力の向上を目指す学校
 - (1) 魅力ある授業の展開
- 2 豊かな感性、健やかな心身を育む学校
 - (2) 学校図書館の充実 読書指導
- 3 家庭や地域住民等と連携した開かれた学校
 - (5) 中学校区学園化の推進
- 4 社会の変化に対応する学校
 - (1)(2) 人的・物的対応
- 5 信頼される学校
 - (1) 頼もしい先生の育成

※（数字）は「人づくり構想かけがわ」の関連する項目番号と内容

掛川市全ての小・中学校が、本報告と自校の分析に基づき、具体的な対応策を立て、実践していくことを望む。

また、保護者への呼び掛けのために保護者向けリーフレット「平成24年度全国学力・学習状況調査から見た掛川の子どもたち」を作成したので、ぜひとも御活用いただきたい。

一方、掛川市の教育をさらに充実したものにしていくために、教育設備・教材備品の充実や各種支援員・通訳などの配置等、物的・人的な支援を関係機関に期待する。

平成24年度 掛川市全国学力・学習状況調査分析委員会

委員 長	土屋 幸代	千浜小学校長	
副委員 長	白井 久雄	原田小学校教頭 (小学校部長、理科)	
副委員 長	杉浦 雅美	原野谷中学校教頭 (中学校部長、質問紙)	
委 員	法月 淳	城北小学校教諭 (国語)	
	石川江美子	桜木小学校教諭 (国語)	
	近藤 奏子	東山口小学校教諭 (算数)	
	杉本 泰康	横須賀小学校教諭 (算数)	
	横山 靖之	第一小学校教諭 (理科)	
	金子 紋也	西山口小学校教諭 (質問紙)	
	山田 浩司	大淵小学校教諭(質問紙)	
	梅葉 紳介	大浜中学校教諭 (国語)	
	岸 美律	城東中学校教諭 (国語)	
	柴田 勝明	大須賀中学校教諭 (数学)	
	岡本 春美	桜が丘中学校教諭 (数学)	
	橋本 輝之	北中学校教諭 (理科)	
	酒井 篤	西中学校教諭 (理科)	
	熊膳 直也	東中学校教諭 (質問紙)	
	事務局	佐藤 嘉晃	学校教育課長
	後藤 克巳	学校教育課指導主事	

分析委員会協議内容 (於:大東支所、13:30~16:30)

第1回 9/27(木)	・委員会の目的、分析方法について共通理解 ・傾向と課題の把握 (部会による分析)
第2回 10/2(火)	・傾向と課題のまとめ (部会による分析)
第3回 10/12(金)	・各部会からの報告・協議 (全体での協議) ・協議を受けての分析の見直しと成果のまとめ (部会による協議)
第4回 11/5(月)	・改善プラン (案) の検討 (全体での協議)
第5回 11/13(火)	・改善プランの策定 (全体での検討) ・学校・保護者向けリーフレットの検討 (全体での検討)